

日本保育者養成教育学会 ニュースレター ■第3号■

The Japanese Society for the Study on Hoikusha Education

2020年9月3日発行 編集・発行 日本保育者養成教育学会

170-0002 東京都豊島区巣鴨1丁目24-1-4F(株)ガリレオ 学会業務情報化センター内

小川博久先生追悼文集

◆経緯

小川博久は、2019年9月18日に逝去しました。満83歳でした。この学会の理事として1年半、かかわりました。選挙により、理事に推挙されたときに、受諾するかどうか、聞きました。高齢で、理事のような役割は面倒でないかと考えたのですが、博久本人は「保育者養成教育」がとても重要であることを日常的に主張していたので、すぐに引き受けることを決めました。

第1回研究大会から、毎回、口頭発表をしました。2019年3月に仙台で開催された理事懇親会では、本当に大好きなお酒を飲み、楽しんでいました。(糖尿病なので、飲みすぎや食べすぎはよくないのですが、何事もセーブするのは好きではなかったのです。)

長年の病気(糖尿病、高血圧、脊柱管狭窄症)は抱えていましたが、保育現場に行くのは大好きで、機会があれば出かけていましたが、2019年6月中旬に自身の体の異変に気づき、検査を受けました。結果は、すい臓がん(ステージ4)でした。治療法はなく、緩和ケアの入院を勧められました。入院は断り、自宅で過ごすことにしました。治療法はないということでしたが、7月から免疫療法と放射線治療を受けていました。本人も家族も、医師からの3か月という告知をあまり信じず、できたらもう少しは生きられるのではないかと希望を持っていました。

次第に横になることは多くなりましたが、普段通りに原稿を書いていた。「保育のことを考えていると、つらい現実を忘れることができる」と言い、食欲がなくなり、ほとんど食べない状況になると、「頭が冴える。どんどん考えが出てくる」と言い、食欲がなくなった事実より、原稿が進むことに喜びを見出しているようでした。

当時1歳8か月の初孫とも本当に幸せそうに過ごしました。

8月下旬ころから、体の移動ができなくなりました。入院が嫌いだった本人が、入院すると言い出しました。家族に迷惑がかかっていることを気にかけていたようです。とうとう、9月13日に入院となりました。医師からは「危篤」と言われました。意識ははっきりしていましたので、お見舞いにいらした方たちに、研究のことを話し、子どもには遊びが大事だと話していました。古い教え子には、飲み屋で飲んでいくようにとまで、話していました。お見舞いにいらした方たち一人一人に「ありがとう」とお礼を言いました。言葉を発するのがきつくなると、握手やハグで感謝を伝えていました。

しかしながら、その時は近づいていたのです。家族がずっとそばにいるように看護師からさりげなく指示され、医師からも宣告され、覚悟せざるを得ない状況になりました。とうとう、9月18日の午後9時に逝去したのです。大嫌いな入院は6日間でした。ぎりぎりの時まで、家にいられたのは幸いだったと思います。また家族の皆で送ることができたのも、よかったと思います。

通夜、告別式には、本当に多くの方たちが参列してくださいました。

次に掲げた小川博久の原稿は、本学会理事会が書いてほしいと決め、依頼したところ、あっという間に書きあげた原稿です。病気がわかった直後くらいのことです。私は、自身の体のことが気になって、原稿など書けるだろうかと心配しましたが、博久にとっては、原稿を書くことこそ、「生きがい」であったのだとわかりました。この原稿は、日本保育者養成教育学会に寄稿してくれたものです。正真正銘の遺稿です。博久の思いを届けられることに感謝します。

小川清美
(小川博久の妻として)

「保育者養成(教育)学とは何か(序説)

一その中核としての保育実践理論の構築一

小川博久(東京学芸大学名誉教授)

(1)はじめに

最近保育者養成教育学会が発足した。筆者も長年、保育者(幼稚園教諭)に関わってきた関係から、この学会の一員になった。自己の実践の妥当性を改めて省察する意味からである。一般に学問(Wissenschaft)の起源は歴史的に問えばそれぞれ多様である。しかし、保育者養成教育学会の創設は、それなりの必然性がある。M. フーコーが近代学校の創設が心理学という学問を生むことになったという様に、保育者養成教育学会の創設と共に保育者養成教育学とは何かを明らかにすることは、我々学会員にとって必要な責務であろう。

近代社会は国民国家創設と共に、多様な近代社会制度を創設した。中でも教育制度は、近代社会市民を育成するという責務を担うという意味で社会制度の中核をなすものであった。わが国では明治期に義務教育制度としてその基礎が作られたが、幼児期の教育つまり保育は、制度の魁は生まれたが、保育の実際は長い間、まだ私事性のうちにあり、親権に任されていた。しかし、平成から令和にかけての社会変化は、幼児期の教育(保育)を公的機関が担わざるを得ない現実を生み出してきた。男女が同等に就労する時代になり、家庭生活の消費化と省力化と少子化は、家庭が幼児の養育環境として不十分であるため、公的保育施設が幼児期の子ども達の保育を担当せざるを得ない状況を生み出してきた。そして、この保育を担当する専門職としての保育者の養成と、日々の保育実践のレベルを確保し向上させる必要性が生まれるに至った。

そしてその責務は保育の専門職である保育者自身であるが、同時に、保育者養成教育に携わる教育者達がその責務を担うことになる。

(2) 保育者養成教育学の実践的課題とは何か

特に保育者養成教育は、公的保育制度の実践を担う保育者の専門性を確立するため、公認された保育者養成教育機関の責務であり、その責務を実現する知識と技能の体系を確立しなければならない。そしてこの知識と技能の体系が、保育者の養成に貢献するものであることを、養成教育の実践を通して実証していく必要がある。そのためには、保育者養成教育それ自体を反省的に省察する知の確立が要請される。この要請が保育者養成教育学会の創設という形になったのである。とはいえ、現行の保育者養成施設の教育内容は極めて多岐にわたっており、その教育内容の総合的結果が望ましい保育者像の形成に繋がるという建前になっている。それ故、保育者養成教育学の課題としては、こうした多岐にわたる教育内容の教育が果たして望ましい保育者養成に有効に働くものであるかについての省察が保育者養成学の基本的課題にならざるを得ない。しかし、現実には、こうした教育内容を教授する担当者の専門性が多様であり、保育者養成の教育内容が望ましい保育者の形成にどう貢献するかという研究は今の所課題のままにとどまっている。

そこで、保育者養成教育を担当する教師が取り上げるべき喫緊の課題を語ることから始めよう。それは、保育者養成校の教師の中で学関連科目を担当する保育研究者が取り上げるべき実践的課題として、保育実習における保育実習生の保育実践力の養成である。それは保育実践学と呼ぶべきものであり、それは保育者養成教育学の中核に位置付けるべき領域である。

本稿はその点を語ることにしよう。保育実践学を語るには保育者の日常の業務に目を向けることから始めなければならない。何故なら保育実習生の保育実践力の養成は、保育者自身の保育実践に対する省察を他者がどう支援するかが基盤となるからである。

(3) 保育の実践と保育者養成教育者との関わり

保育者の日々の実践は、幼児達のケアと教育であり、かつては、母親の日常的行為とされていた故に、経験的知恵とみなされ、習熟ごとによって獲得されるとされてきた。しかし、現代では、この分野は小児科医学や産婦人科医学との隣接領域でもあり、多くの科学的知見が求められるようになっている。保育者を目指す学生は、そうした知見を学びつつ、日々の保育に対処する必要が求められている。とはいえ、実際の保育の行為は、幼児達の成長過程を一日一日丁寧に過ごすことであり、幼児達の日々の暮らしに寄り添い、幼児の行為を見届け支援をしていくのが保育者の役割である。

こうした保育者の実践の良し悪しを保育者自身はどう評価し、自己の実践のレベルを維持していくことができるであろうか。日々の実践の多忙さに明け暮れ、そうした意識を持つことを忘れてしまう保育者も少なくない。何故なら、自分に実践の正しさは子どもの確かな成長に現れるのであるが、その結果はすぐには見えてこないからである。保育者は日々幼児達と過ごしながら、日々の保育の中での幼児達の様子を、記録などを通して見届けて行きその事実の軌跡を一週間なり、一月なり、辿った時に、ああ入園当初から見て成長したのだという実感を得的のである。しかもその変化をまずはクラス集団の育ちとして捉えても、幼児一人一人を見つけることは決して容易なことではない。

ここに、保育者の保育実践を評価し、その水準を維持する責任を持つ役割として、保育者養成教育に携わる教師達がいる。特に、保育者養成教育において、保育学関連科目を担当する教師、特に保育実習を担当する教師は、保育実践に直接関わらざるを得ない。保育者養成教育の担当者は本来であれば、保育実習生の保育実践に立ち会い、実習生の実践の実際を評価し、問題点を指摘し、明日の実践への指針を提示できることが望ましい。しかし、その前にすべきことは、保育者が自分の実践を振り返り、自己の実践の反省点を自ら自覚できる様にすることである。そのためには何が必要か。

(4) 保育実践の把握とその評価とは

一 当時者的「現実」と向き合うこと

第一に求められるべきは、保育実践の実態を把握することである。具体的には保育者が日々向き合う子ども達との関わりであり、その関わりから構成される日々の生活である。しかし、これを捉えること自体決して容易なことではない。保育者と子どもとの関わりは、様々な側面を持っている。保育者と子ども達の関わりは、まずは集団生活として現れる。しかし、子ども達一人一人はそれぞれ固有な個性と生き方を表示しており、保育者とのやり取りも、子ども同士のやり取りもその瞬間瞬間で固有の意味を持ったりもする。一方、保育者は保育の専門職として、子どもの成育に対し、父母に一定の責任を負う立場である。それ故、日々の実践は、法的な規定や制度上に決まりを遵守する立場でもある。一体、こうした保育の現実に対し、保育の「実態」を把握するという作業は決して容易な仕事ではない。

ただこうした総合的な営みである保育の“実態”をどう把握すべきかといえ、その出発点はやはり、保育者自身が日々実践の中で向き合っている子ども達との具体的関わりを「事実として」把握することである。とはいえ、この関わりは、単に、第三者が誰でも確認

出来る「事実」であると言い切ることはできない。なぜなら、保育者と子ども達のやり取りは、園外保育の時に、たまたま子どもが見つけた動物や植物のことであったり、遊びの中で子ども同士がトラブルになり、お互いに「悔しい」気持ちを調整することでもあったりもするからである。保育者のこうした日々の保育実践は、みんなでお片づけをきちんと処理出来ることから、泣いている幼児の心に寄り添うことまで含んでいる。それ故、保育者が実践において抜き合う「現実」は、保育者が向き合う「現実」のことを当事者的「現実」と呼んでおこう。

(5) 当事者的「現実」把握の難しさ

しかし、この「現実」が保育者の独りよがりになってしまうと、子ども達の望ましい発達には保障されない。保育者は日々向き合う子ども達との「現実」が子ども達の健全な発達に沿っているかという点検を継続していく必要がある。そのために必要なことは、自分と子ども達とのやり取りを保育終了後、あれでよかったのかと反省してみることである。例えば、他児とのトラブルで泣き止まない幼児に寄り添ってかなり時間をかけ、そのため、クラス全体に対しても放置する結果になってしまった。ああした対応でよかったのかと振り返ってみることである。この振り返りには、正解は無い。ただこうしたふりかえりを続けることで、自分の実践を見直す目が養われる。しかし、保育者が自分の保育に対しこうした省察を続けることは決して容易ではない。なぜなら、入園当初集団生活の経験のない幼児集団を導く存在として、自分のリーダーシップに不安感を抱いたりすれば、クラスは混乱状態になることもあるからである。にもかかわらず、保育者は自分が当面した当事者的「現実」を改めて、より客観的・眼差しで見直すことは必要である。

そこで、保育者のこうした省察に参加しなければならない役割が存在する。それは前述にある様に、保育者養成教育を担当する教師である。この役割は保育者養成教育機関において、将来保育者を志望する学生達の保育実践を指導する立場にある。養成校の講義内容でレクチャーした保育原理や保育内容総論、保育課程論等の授業内容が、保育実習の中でどう具体化しているか、保育者としてのパフォーマンスはどうか、保育者の卵として、学生の保育実践を評価し、彼らの実践力をたかめるのが保育者養成校の教師の役割である。この両者は、いずれも保育実践の向上を図るという目的で同一課題を抱えながら、それぞれの立場は少しずつ異なる。保育者自身は、実践当事者であり、子ども達との関係の中にいる。野球で言えば、プレイヤーである。そのため、自己の当事者的「現実」を客観化することに困難を伴う。

保育者が子ども達の遊びに参加してそのやり取りを客観的に読み取ることは難しい。このやり取りには、しばしば幼児の心情の高まりに応答することも少なくない。例えば、「先

生！やった、僕、ダンゴムシ捕まえられたよ」とある幼児が保育者に訴えてきた時に、保育者の反応は、「たけしくん、やったね、すごい」と言った、情緒的同調であろう。そうした幼児とのやり取りの場合、幼児との心情に傾斜した保育の構えは、ダンゴムシを捕まえる時の幼児の行動の詳細を、客観的に捉え記憶するということは決して容易ではあるまい。また、保育者の特定の幼児への関与は集団生活の中で視点をその幼児へと絞り込むことであり、その際、保育者が集団全体への俯瞰する眼差しを維持しなければ、その前後の保育の状況を客観視することは困難である。昔、保育者は壁を背にして立てと言われたものである。自分の背後にいる子どもの実態を把握することが難しいからである。

このように、保育者の当事者的「現実」理解は、当然のことながら主観的バイヤス(偏り)を伴わざるを得ない。それに対し保育者養成校の教師は、当初から保育実習生の保育実践を第三者的立場で評価する立場に立たされている。この立場は保育者(実習生)の実践のパフォーマンスを客観視する点では有利であると言える。しかし、それだけでは、保育者の当事者的「現実」は捕まえられない。

それは、あたかも野球のファンが観客席で自分のチームを応援するあまり、ピッチャーの失投に「何やってんだ、バカ」と罵声を浴びせる行為にもなりかねないのである。野球評論家の野村克也氏は、一橋大学での講演でキャッチャーの役割について興味深い話をしている。自分のチームの選手も相手チームの選手もダイヤモンドの中でプレーしている。しかし、キャッチャーは、ダイヤモンドの外でプレーしている。相手打者のバッティングフォームを見ながら、ピッチャーと配球の工夫を考え、味方選手の守備の立ち位置を検討し、塁上の相手選手の動きにも警戒を怠らない。こうした配慮をダイヤモンドの外から瞬時に判断し、投手にサインを送るのが優れたキャッチャーの役割である。良いキャッチャーのいるチームは強いと語った。この話は試合の当事者でありながら、キャッチャーの立ち位置が、試合の全体状況を俯瞰できる位置であることにより、状況の全貌を視野に入れながら、プレーの細部に関わっていくことができるというのである。

(6)当事者的「現実」を客観的に把握することの必要性

以上の話は、保育者養成を担当する教師が、保育実習生の保育を第三者の視点から客観視するだけでなく、保育を担当する実践者の当事者性を、どう引き受けるかという課題を保育者(実習生)と共有する必要があるということになる。それは、元プロ野球で投手として活躍した人が、TVの野球中継の解説者として話をする場合に、具体的に現れる。強打者に対応するときの投手の当事者の心理や思考、心情などが読み解かれる。教師の中

で最も優れた能力が求められるのは、コーチである、と言われる。その理由は、コーチ自身がかつて高い技能を獲得した経験を持つとともに、自分がかつてアスリートとして経験した当事者性を備えているからである。

以上のことから、保育者自身の保育実践力を高めるためには、1、自己の実践をより客観的に見直す必要があること、そして2、それには、自己の実践への省察をする必要がある。しかし、保育者の実践は「当事者」的実践であり、その客観性には自ずと限界がある。一方、保育者養成教育担当者の教師は、その責務として保育実習における保育者候補生の実践を見て評価し指導しなければならない。そして前述のように、その際、実習生の「当事者」に寄り添った上で、客観的に実践を把握することが求められる。それは実習生が自己の実践を省察出来るようなる道筋でもある。

(7)保育実践学の構成

一保育者の反省的思考を客観的に保障する保育者養成教育担当者(保育実践研究者)

保育者養成教育担当者の実習生に対する実践指導の関わり方は、レベルの違いはあれ、保育現場の現職教育即ち、保育者の保育実践指導への関わりと基本的に変わりはない。かくて、此处に保育者養成教育学、言い換えれば、保育実践学の基本的枠組みが構成される。即ち、保育者養成教育学(保育実践学)は、二つの分野、保育実習における保育実習生と保育現場における現職の保育者の保育実践の向上を目的とする学問である。そしてこの学問を必要とする職種は、一つは自らの保育実践の向上を図るために実践を省察せざるを得ない保育実習生であり、現場の保育者である。そしてもう一つは、この省察をより有効にするために、より客観的にすることを義務づけられている保育者養成教育の担当者である。両者は共に保育実践というフィールドを共有しながら、保育実践の向上を図るという点で同じ地点に立ちながら、保育実践を客観視するスタンスにおいて相違がある。

一方、保育者養成教育の担当者は、研究の客観性にのみ自己の立脚点を置いてしまうと、保育実践者の当事者的現実と向き合えなくなる。保育者の「当事者的現実」を理解するためには、自らが保育者の経験を持つとか、保育者養成教育において自ら「教育実践」の当事者であるという自覚が求められる。比喩的に言えば、保育者(保育実習生)と保育者養成教育の担当者との関係は、サッカー選手とコーチ、舞台芸術の役者と演出家との関係に擬せられる。前者は舞台(授業)の場面で自らの身体を使って保育の場面を構成する人、後者がその動きを舞台の外から見て、選手や役者の振る舞いを検討してあるべき姿をアド

バイスする人である。それ故、後者は過去に選手や役者の経験(当事者感覚)がある方が望ましい。

(8)おわりに

一保育実践学を基盤として保育者養成教育学を「学」たらしめるために

上述の様に保育実践学の構想が確立されるならば、その実践的課題解決に対して、現在、保育者養成教育機関で構成されている多様な教育内容がどの様に関連するかが改めて問い直されることになるであろう。とすれば、おそらく、保育者(実習生)の保育実践力の養成により直接的関連を持つ教科とより間接的関連生を持つ教科の区別や、様々な教科目の相互関係性も保育実践力養成との関連性において追求する必要が生まれるであろう。そうした研究の視点を確立するには、既成の教科目を通底し、教科目のジャンルを超えた視点をもたねばならない。

(1)で述べたが、現行の保育者養成校における多様な教科目から構成される教育課程編成が、保育者(実習生)の実践力形成にどう関わるかという課題を探求する道である。この研究のあり方こそ、学問研究であるという自覚を持つべきである。それが「学問」(Wissenschaft)であるということは、この実践研究において、保育実践の具体的問題解決に取り組むだけではなく、「保育」と「子育て」との違い、保育者と親の役割との相違、保育制度とは何か、ベビーシッターなどの概念について改めてその意味や意義を問い直すという哲学的思考を働かすことである。例えば、「子育て」の親は、保育者の様に、自らの実践を省察することが要請されない。こうしたメタ思考が、保育者の実践の省察に新たな展望を開くことにもなるのである。そしてそれが、保育者養成教育を「学」たらしめるのである。

小川博久先生を偲ぶ

【小川博久先生を偲んで】

白百合女子大学 高橋貴志

「教育学特殊講義」。今から 30 年以上も前のこと、私が学部の 3 年生の時に受講した授業の名前です。当時私は、文学部哲学科教育学専攻に所属しており、中学校か高校の社会の教員になることを、何となくイメージしながら学生生活を送り、何となく履修登録した科目が、数ある選択科目の中の一つ、「教育学特殊講義」でした。

担当教員は、非常勤講師としていらしていた、小川博久先生でした。ボサボサの髪の毛（先生ごめんなさい！）をかきあげながら「私の授業で居眠りをするのはかまわない。それは私の授業がつまらないからで私の責任。でも、私語は私の話を聞きたい人にとって迷惑なことだから許しません。」と初回の授業の時間におっしゃったことを今でもよく覚えています。教員としてつまらない授業はしない、という強いご意志を感じると同時に、これから始まる授業の内容に期待が膨らみました。ボーっとしていた頭が一気に目覚めました。

授業の内容は、主に「遊び論」でした。教育と遊びを結びつけて考えることは、保育者養成の場に身を置く今となっては、当たり前のことですが、当時の私にとっては衝撃的でした。

半期の授業でしたが、すべての回の受講を終えたときには、それまでの教育イメージ、教員イメージ、学校イメージがことごとくりセットされていました。この授業をきっかけに、私の興味関心が幼児教育・保育に完全にシフトし、大学院で先生のご指導を受けたいと思いました。

先生の研究室は院生部屋同然の状態、小川研の院生にとっては生活の場と言ってもいい場所でした。先生はその状況を当たり前のものとして、受け止めてくださっていました（少なくともそのようにしか感じられませんでした）。先生は、晩年まで、保育における「生活」の重要性について、主張されていましたが、大学教育においても、同様の手法で学生や院生にメッセージを送ろうとしていたのだらうと思います。紙面の都合で、内容は割愛しますが、先生から教えていただいたことの中で大事なものの多くは、授業以外の場で

得られた内容です。(園内研に同行する際の電車の中で、あるいは、フィールドワークの際に泊まった宿の温泉につかりながら…)

先生は保育においても、子育てにおいても、大学での学生指導(保育者養成)においても、一貫した教育観、指導観をもっていらっやっったと思います。そのお姿は先生に師事した者すべてにとってモデルになっているのでは、と思います。できの悪い私などがその域に達することは到底できませんが、少しでも近づくことができればと思っています。お会いするたびに、「おー、元気か。しっかりやれよ！」と声をかけていただきました。その声の響きを胸に刻みながら、先生のご冥福をお祈りしたいと思います。どうもありがとうございました。

釧路の思い出ばなし

日本女子大学 請川 滋大

小川博久先生の訃報に接した時には、何か大きな柱を失ったような感覚に襲われました。小川先生には大学院の修士時代からお世話になり、ゼミや同伴させてもらった園内研などで大変良い学びを得ました。

小川先生の大学教員としてのスタートは北海道の釧路市で、偶然ですが釧路は私の故郷でもあります。私が東京学芸大学大学院を受ける際、母校(北海道教育大)の恩師からは、かつて小川先生が北教大釧路分校の教員をしていたことは聞いていました。しかし大学生だった私は学会などに参加したこともなく、小川先生の事は本の著者としてしか知りませんでした。当然、そのお顔などは分からないわけです。大学院受験の日、4人の先生が面接官として私の前に座られました。1人は女性(岩立京子先生)でしたが、他の3人のうち誰が小川先生なのかは分かりません。そんな状態で面接を受け、緊張しながらも質問に答えていったのです。最後に「これで面接を終わります」と告げられ、私が席を立ち上がろうとした時、一番厳しい質問をしてきた面接官に「ところで君は釧路のどこに住んでいるんだ？」と聞かれ、そこで初めて「この人が小川先生なんだ！」と気づいたのでした。

大学院入学後は4人の先生方の授業を受けましたが、小川先生は授業の中でよく釧路時代の話をしてくれました。当時の学生たちとゴムボートで釧路川を下ったことや、大学から研究費をもらって学生と一緒に映画を作った話など今でもよく覚えています。わずか

数年間の釧路での思い出をこんなにも楽しそうに語ってくれるので、同じ街で育った者としてとても嬉しくまた懐かしく感じたものです。

改めてこの文章を書いてみて、今の私が学生達にそういった楽しい話ができているかという…反省しきりです。研究者としてのみならず、教育者としての小川博久先生に出会えたことがとても大きな財産です。感謝してもしきれません。小川先生、ありがとうございました。

追悼:ぶれのない幼児教育論は永遠に

大阪総合保育大学 大橋喜美子

小川博久先生と初めてお話ししたのは、2018年に共立女子大学で実施された日本保育者養成教育学会前日の理事会後に東京メトロの「九段下」の駅までご一緒させていただいた時だった。10分位の間に、保育者養成教育学について熱く語ってくださった。あまりにも気さくで対等で気取りが無いお姿にびっくりした。

それまでは、学会等でご挨拶をさせていただく程度で、私にとっての小川先生は、いつも壇上におられる偉大な存在であり、多くの教え子と共に熱く語られるお姿を横目でちらちらと拝見していただけだった。

一方で、多くの論文やご著書からは、子どもや保育者の立場に立ってお話をして下さる先生であること、どのような議論にもきちんと対峙されているお姿が印象としてあった。

先生が、幼保一体化や子育て支援、子どもの遊び論、保育者の専門性、保育の計画、保育者養成を語る全てにおいて、子どもや保育者の立場に立っておられた。ぶれのない論に感動を伴った学びを経験したのは私だけではないだろう。その感動は批判や共感を含めて、時に厳しさを伴いながら、人としての暖かさや優しさにあふれ、そこに先生の研究の原点を垣間見る思いがした。

病床で執筆された「保育者養成(教育)学とは何か(序説)―その中核としての保育実践理論の構築―」では、保育者養成教育学の課題と保育実践学、そして、保育者と子どもが向き合う複雑な営みへの課題を当事者的「現実」として示唆しておられる。ここでも、保育現場への想いと共に現場に向き合う研究の方略を今後の課題とされている。

保育現場が出発だった私は、実践と研究が繋ぐ「学」として構築する保育の必要性と、その曖昧さが導く人の心のコラボが大切と考えてきた。それを考えるとき、いつも小川先生から学びをいただいていた。

保育は果てしなく続く道、子どもを取り巻く様々な関係性が大きな夢を膨らませ追い続けることのできる道であることを考えると、自分はまだまだ「ひよっこ」、これからも先生からの学びを自分なりに解釈していきたいと考えている。

ありがとうございました。そして、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

小川博久先生を偲ぶ

日本女子大学 和田上 貴昭

恥ずかしながら小川博久先生の存在を知ったのは10年くらい前でしょうか。保育者養成に携わるようになってからになります。それまでは社会福祉士や精神保健福祉士養成に携わり、ソーシャルワークの理論と自身の児童養護施設での実践経験を基盤にソーシャルワーカーの養成を行っていました。保育者養成に携わるようになって気づいたことは、(日本の)ソーシャルワーカーの養成課程には暮らしの視点が欠けていることでした。生活支援を扱うソーシャルワーク教育に暮らしの視点が欠けているというのは不思議な話ですが、保育者養成課程の児童文化や表現系の科目で行われているような豊かな暮らしという視点はないように感じます。

それ故に、子どもの姿を生き生きと捉える保育学の研究は新鮮でした。特に小川博久先生の研究は子どもたちの姿をていねいに捉えていました。表面的に見えている状況だけでなく、子どもたちの内面や背景も踏まえているようでした。子どもとのかかわりを研究として切り取ることは困難です。これは社会福祉実践の研究においても共通することです。人には歴史があり、人と人との関係性は多様で、事象に対する人の認識は異なります。いかようにもその場面を切り取ることができ、恣意的に扱うことができます。小川先生の研究では確固とした価値観と科学的根拠の下、適切に分析が行われているように感じました。こうした研究の視点や手法は、私が専門としている社会的養護実践における研究においても有効だと考えます。こうした功績のある先生が逝ってしまわれるのは本当に残念です。

小川博久先生のご冥福をお祈り申し上げます。

小川博久先生のうしろ姿

大妻女子大学 石井 章仁

小川博久先生をはじめてお見かけしたのは、ある園での研究(公開)保育の場だった。その園には、しばしば研修に訪れているご様子で、保育者のこともよく知っていらっしやうた。たまたま、前職のゼミの卒業生だった保育者が担任をしているクラスの前で人だかりができており、博久先生がその保育を観ながら何か語っていると、周りに群がってお話を聞いていた。私もそばに行き、耳をそばだてると、「あいつの保育はなかなかうまいよ…」といったことを話していた。見ると、クラスの中で3つくらいの遊びの場があり、中心に制作コーナーがあった。その中心に保育者(元ゼミ生)がいた。何かをやりながら、遊びが停滞した中に自然に入り、また活気づいてきたら自然に抜けていた。子どもの様子をつかんでおり、必要に応じて遊びを活発にしようとし、さらに広げようとしていた。その様子を博久先生の解説とともに見ていて、胸が熱くなったとともに、こう観てこう解釈するのだなと感心しきりだった。保育者の学生時代のことを知っているからかもしれないが、人付き合いで得意としているような面が保育にも出ており、かつ、それを先生に認めてもらっているように感じた。保育を観ながら語ることで、その場면을観る視点が周囲に共有されていくようだった。

また、ある研修場面のVTRのなかでの博久先生も印象深かった。その映像では、博久先生が子どものいない机で、一人粘土をドスンドスンと丸めだし、真剣に粘土で遊んでいた。すると、周りに子どもが集まり出し、ついには同じように粘土をやりだした。それは、遊びのモデル、あるいは共同作業者としての保育者の姿だった。まさに、大人が黙々と向き合っていると子どもはそこに惹きつけられているようで、その場面が焼き付いて離れない。実際に園内研修に行くと、保育者が楽し気にモデルになってみたらいいのと思う場面に出くわす。「先生もやってみたら」ということもあるし、自分もそれを模倣してやってみることもある。そんな時にこの場面が頭を過る。

最後に、養成教育学会の発表での場面も印象深い。発表者が園内研修での講師の関わり方についてファシリテートの側面を強調していた時、先生は、「講師が自分の視点を伝えないでどうする」といったようなことを発言された。園内研修では、限られた時間の中で保育者の話を引き出し、組織の中の対話を促進させたい思いは強い。しかし、保育者が実践の中で見えないことや気づけなかった意味、そのきっかけを投げかけて課題に直面するようにすることも同時に我々に求められるのではないだろうか、そのやりとりの中から

気づかされた。先生に実際に指導を受けた保育者、共に研究した研究者、指導を受けた学生は羨ましい。

小川博久先生のご冥福をお祈り申し上げます。

小川 博久先生からの「宿題」

桜美林大学 爾 寛明

小川博久先生は、私が大学時代に教科書に出てこられていらっしゃった方であり、私にとっては、まったく雲の上の人でした。初めてご尊顔を拝することができたのは、日本保育学会が東京学芸大学であった時でした。偶然お会いすることができ、そのときは、何も話せなかったことを記憶しています。

時は流れて、日本保育者養成教育学会が発足し、その運営が設立準備委員会から、理事会へと移ったときに、小川博久先生が理事になられた時にお会いすることができ、また、光栄にもお話をすることができました。そのときに話されたことが、今となっては、私への「宿題」となっていると思っています。

小川博久先生の切り口は、「鋭利で的を射ている」という感じです。私もそのような力量をもつことができたらと思います。小川博久先生からは、「保育者養成学の為には、保育の現場にいる人達がより多く参加できるようにしないとイケない。」という言葉いただきました。保育者養成ということは、養成校と保育の現場が担っていることですから、その意味から考えると、保育現場の人たちの参加は必須のことだと思いました。どうしても「学会」ということから、研究者のための場であるかのような印象が強いと思います。しかし、「学会」という場でも、その分野においては、研究者以外の参加が求められる、研究者と違う視点からの意見を受けとめることはとても重要なことだと考えました。そのような分野である「保育」において、研究者中心で始まったではありますが、いかにして、保育現場の方々に参加していただくことができるかという大きな課題を与えられたのだと思っています。それが、今となっては、私にとっての大きな「宿題」となっていると考えています。今後保育現場の方々を量的に増やしていくだけではなく、充実した研究へ参画していただけるような学会づくりをしていけたらと思っています。

小川先生のご冥福をお祈りします